

環境評価についてそれぞれ挙げているが、この3つを総合評価すると立地環境をデメリットの方が大きいと評価する事業所はごく僅かであり、周辺で多数の受注先・外注先が確保できたことがこの最大の要因である。規模が小さいゆえに可能な乗務の内容は限られているため、相互補完的な多数の取引先を確保できるような集積に依存しているということがわかる。

第5章は、大田区の工業の概要及び筆者が実際に行なったアンケート調査の結果とその分析について述べている。多くの事業者が、納品の時期や管理が厳しいことを指摘している。また、量産のきく自動車部品は海外の単価が安いものに押されて付加価値が小さく、国内での展望はないのではないかということ述べている。我が国工業の海外を含めた広域的な生産体系が進展してゆく中で、

従来技術による量産加工の必要度は明らかに薄れており、都市の中小工場がこれまでの地域集積のなかで生き残ってゆくのは困難ではないだろうか。今後は、これまでの地域集積の優位性（多品種少量・高難度な加工にも対応できる技術と多様性を生かした不定期的・単発的需要への対応）を残しながらも、新たな技術集積を生みだしてゆくことが必要である。これには大企業の中小企業への人材交流・資本援助などが必要不可欠（選別になりがちだが）であり、これによってレベルアップした中小企業の技術を今度は大企業が利用するという、互いが垂直となった技術の集積が大切である。地域集積による中小企業同志のこれまでの交流を残しながらも、大企業・中小（零細）企業を越えた相互交流が、新たな技術集積に大きな役割を果たすであろう。

## 東京の場所イメージ

—都内大学生の手描き地図を手がかりにして—

鳥田千洋

(掲載論文)

## 花祭りの再生とその背景

—開拓地豊橋市西幸町周辺を事例として—

倉光ミナ子

「伝統」という言葉は、不変でかつ固定的なものを指す言葉として様々な場面で使われている。しかし、実際の「伝統」は創り出されたり、変化したりする。では、私たちは、一体何を「伝統」と呼んでいるのだろうか。

本論文は、このような関心から、愛知県豊橋市の開拓地において行われた花祭りを事例に、その再生過程を追い、花祭りを再生させた背景を分析し、さらにそこから「伝統」が「伝統たらしめられる」側面を考察することを目的としている。

研究の方法は、フィールドである愛知県豊橋市西幸町とそこの入植者の故郷である愛知県北設楽郡豊根村における聞き取り調査と、二次的な資料

を基にした。

再生された花祭りは、北設楽郡を中心に数百年という長い間、続けられて来た冬の祭りであり、山村地域という厳しい生活環境下では、一年の内の最大かつ唯一の祭りでもあった。また、花祭りには、集落の共同意識を強める役割も見られ、集落の社会構造や上下関係そのものが現れてもいた。

豊根村からの豊橋市・高師原への集団入植は、第二次世界大戦直後、食糧不足・耕地不足を背景に、「豊根村分村計画」として開始された。開拓作業は組合（農協）を中心に行われた。形成された開拓集落は、依然として行政村としてより、集落ごとの結びつきが強かった豊根村の状況をその